

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 降幡 正志 印

学位申請者 岡本 進

論文名 **Prediacate structure and valency changing processes of Vatulele Fijian**
(フィジー語バトゥレレ方言の述語構造と結合価変更プロセス)

結論

岡本進氏から提出された学位請求論文 **Prediacate structure and valency changing processes of Vatulele Fijian** (フィジー語バトゥレレ方言の述語構造と結合価変更プロセス) について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は降幡を主査に、副査として本学のアジア・アフリカ言語文化研究所の塩原朝子教授、国立民族学博物館の菊澤律子教授、本学の内原洋人准教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文は、フィジー語バトゥレレ方言の述語構造と結合価変更プロセスを、ほかのフィジー諸語との対照を交えながら記述するものである。この言語の特異性を明らかにするため、類型論的な考察も加えている。

本論文の構成は以下のようになっている。

第一章から第四章は本論文の導入部である。第一章ではフィジー語バトゥレレ方言についての予備知識をまとめている。この言語はフィジー共和国バトゥレレ島で話されており、系統的にはオーストロネシア語族、マラヨ=ポリネシア語派、オセアニア諸語に属す。

第二章ではフィジー語バトゥレレ方言の音韻論を概説している。この言語は五母音体系や開音節構造など、典型的なオセアニア諸語の特徴を示す。

第三章は、Geraghty (2002) の枠組みに基づく文法スケッチである。概して、この言語はVO語順の言語の特徴を示す。すなわち、冠詞は名詞に先行し、前置詞を使用し、関係節は主要部に後続する。

第四章では、フィジー語バトゥレレ方言において、「語」がいかに定義されるべきかを論じている。この言語では、音韻的境界と文法的境界が食い違うことがある。そのため、「音韻語」と「文法語」の二種の語を設定することが、この言語の分析を行う上で有効である。「語」に加え、「接辞」や「接語」も当言語でいかに定義することが難しいかとい

うことについて記述している。

第五章から第十章はフィジー語バトゥレ方言の述語構造と結合価変更プロセスに焦点を当てている。

第五章では述語の構造を記述している。動詞だけでなく、名詞も形容詞も述語の主要部になりうる。そのため、フィジー諸語において品詞を設定することには大きな困難がある。本論文では、まず語彙クラス（名詞、動詞など）と統語機能（項、述語など）を区別した。バトゥレ方言を含むフィジー諸語では、語彙クラスと統語機能が密接に結びついていない。換言すれば、形態論的プロセスを伴うことなく、名詞・動詞のどちらも、項・述語として機能しうる。そのため、「名詞句」や「動詞句」という術語は慎重に扱う必要がある。なぜならば、それらはその主要部が名詞や動詞に限られることを、暗に示しているからである。述語は節内の必須項と一致する拘束代名詞を含む。ほかの西部フィジー諸語と同様、この言語の拘束主語代名詞には、時制の区別がある。それぞれに非過去形と無標形があり、前者は現在や未来の事態に用いられ、後者は過去の事態を表すほか、従属節に現れる。標準フィジー語にこの区別はない。それに加えて、述語内には任意の修飾要素も現れる。修飾要素は述語内の決まった位置にしか現れず、主要部の前に現れる群と後に現れる群とに大別される。このような特徴から、この言語は主要部標示型言語であるといえる。ただし、述語はふつう複数の音韻語から形成される。

第六章では、この言語が「他動詞化言語」であることを示している。すなわち、自動詞から他動詞を派生する傾向の強い言語である。この一般化はほかのフィジー諸語にも当てはまると考えられる。典型的な他動詞は、これらの自動詞に接尾辞を付加することで派生される。「殺す」や「燃やす」のように、動詞の意味的他動性が高い場合、他動詞は接尾辞なしで現れうる。「恐れる」のような感情など、ほかの言語では形容詞で表されうる事態も、この言語では他動詞構文によって表される。本章では Nichols et al. (2004) の枠組みを用いて、フィジー語バトゥレ方言における動詞の自他交替パターンを記述している。

第七章では複他動詞、つまり動作主、移動物、受け手の三つの参加者を要求する動詞を扱っている。フィジー語バトゥレ方言において、「あげる」のような典型的な複他動詞は *indirective* 型の格配列を用いる。すなわち、移動物項が目的語として現れ、受け手項が周辺項として現れる。一方、「投げる」のような投擲動詞や「食べさせる」のような使役動詞は *secundative* 型の格配列を用いる。すなわち、受け手項が目的語として現れ、移動物項が周辺項として現れる。

第八章ではこの言語の名詞抱合を記述した。名詞抱合は、目的語名詞と動詞が並置され、一つの複合動詞を形成するプロセスであるといえる。従来、フィジー語を含むオセアニア諸語の名詞抱合は、しばしば一種の自動詞化として分析されてきた。フィジー語バトゥレ

レ方言でも同様の名詞抱合が観察される。興味深い点は、名詞抱合が他動詞化し、新たに目的語をとりうるということである。この通時的変化は、Mithun (1984) の名詞抱合についての仮説に合致し、類型論的に価値のある発見である。それに加えて、名詞抱合が他動詞化されるということは、それが単一の文法語であることを裏付ける。しかし、名詞抱合は音韻的には複数の語から成る。

第九章では「前置詞動詞構文」を記述している。この構造では、本来後続する名詞句に音韻的に依存する前置詞が、先行する動詞と音韻的に一つの語を形成する。一見、その音韻的統一性から、前置詞動詞は一種の他動詞、すなわち適用構文として分析できそうである。しかし、前置詞動詞の前置詞は、文法的には決して先行動詞と結合しない。名詞句の移動や疑問文の形成などにより、前置詞動詞の名詞は必須項（すなわち目的語）ではないことがわかる。第四章で述べたように、ここに音韻と文法の不一致が観察される。

第十章では存在文と所有文を記述している。どちらも存在動詞を用いるという点で共通している。しかし、フィジー語バトゥレ方言の存在文・所有文では、存在動詞だけでなく数詞も述語として機能する。前述のとおり、この言語は「他動詞化言語」であるものの、所有文では他動詞を用いない。その代わり、所有者は名詞句内あるいは周辺項として現れ、所有物は主語として現れる。

第十一章では結論として本論文が新たに明らかにした独自の知見をまとめている。

審査の概要及び評価

上記のように岡本進氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、フィジー語の述語構造と結合価変更プロセスを詳しく解明することに成功している。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。各委員より特に高く評価されたのは、以下の点である。

- ・現地調査に基づき、少数の話者によって話されている言語を記述していて、貴重である。
- ・矛盾なく文法の骨格が描かれていて、読みやすい文法記述になっている点が評価できる。
- ・言語類型論的な研究も多く参照し、単なる記述にとどまらずいくつかの類型論的分析・考察を行っている点が評価できる。
- ・フィジー語でも西フィジー語に属する方言の記述は少ないので貴重である。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

- ・用語の一部、特に品詞の定義が意味に拠っている。形態統語的に定義すべきである。「態」

などをはじめとする術語の定義が不足している。

- ・「韻律語は 2 モーラなければならない」というような最小性制約を設定することによって、基底と表層における母音の長さの違いや、前置詞動詞と代名詞の振る舞いなどをより統一的に説明することができるのではないか。

- ・複文や情報構造、他の方言との音対応や歴史的変遷についても今後研究を進めて行ってほしい。特に主題と題述の判断にイントネーションが関わっていると考えられるため、情報構造とイントネーションの関連について研究すべきである。態と情報構造の関連についても研究を進めるべきである。

- ・特に他のフィジー語研究者にとって問題となる点に関して、論旨を明快に伝えるために英語の表現をより洗練したものにする必要がある。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。フィジー語文法全般の記述研究の進展、さらにはフィジー語を含むポリネシア諸語、ひいてはオーストロネシア語族の諸言語の記述研究・対照研究・類型論的な観点からの研究に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者岡本進氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。